

福島原発事故を題材にした少女マンガに見る  
女性と地域社会

— マンガ「デージー〜3.11女子高生たちの選択〜」を事例に —

矢内 真理子

Local Communities for Women as Seen in Shojo-Manga Dealing with the  
Fukushima Nuclear Power Plant Disaster

— A Case Study of *Daisy: High School Girls' Choices after March 11* —

YANAI Mariko

## Summary

*Daisy: High School Girls' Choices after March 11* (Manga: Momochi Reiko; original: Kobayashi Teruhiro, Kusanagi Darai, and Nobuta Tomoji) is a series that appeared in the shojo-manga magazine *Dessert* (Kodansha Ltd.). It depicts four high school seniors attending school in Fukushima over a one-year period after the power plant accident. Two aspects differentiate *Daisy* from other works dealing with the accident and make it suitable for analysis. First, although it is a work of fiction, the content is based on actual interviews of students in Fukushima. Second, the impacts of the accident on the characters' lives are depicted through subtle changes in the characters' emotional states, which is a hallmark of shojo-manga.

The manga was analyzed from the standpoint of the characters' views of the local community in the context of choosing life courses and careers, and whether the characters' connections to the local community strengthened or weakened after the accident. All characters chose life paths motivated by the desire to "help Fukushima" and had greater interest in their communities after the accident. On the one hand, the characters are depicted as proactively choosing career paths and life styles that differ from gender stereotypes. On the other hand, this may also be interpreted as an expectation that the characters move quickly into their roles as adults to better their community without the usual moratorium.

Families function as secure bases to protect children at all times, and to which children can return when they encounter dangers in the outside world. Perhaps the same can be said of communities and people as a whole. In a context where secure bases have been shaken by the accident, it appears young girls' ties to local communities as settles in both emotionally and physically have strengthened.

**Keywords:** shojo-manga, Local Community, The Fukushima Nuclear Power Plant Disaster, *Daisy: High School Girls' Choices after March 11*, secure base

## 要 旨

「デイジー～3.11女子高生たちの選択～」(漫画：ももち麗子、原作：小林照弘、草薙だらい、信田朋嗣)は講談社の少女マンガ誌『デザート』に連載された作品である。本作品は原発事故後の福島の高校に通う4人の高校3年生の卒業までの1年を描いている。「デイジー」が他の原発事故を題材にした作品と異なり評価できる点は2点ある。第1に本作品は架空の人物が登場するフィクションだが、作者が福島の学生などに取材した内容に基づいて構成していること、第2に少女の日常生活に及ぶ事故の影響を、少女マンガの最大の特徴である登場人物の細やかな心の動きを用いて描いていることであり、それゆえ本稿では本作品を分析の対象とした。

困難な局面において主人公たちが進路決定・職業選択を行う経緯を、地域社会をどう意識しているか、事故前と比べて地域社会との結びつきが強化されているかという視点から分析した。その結果、いずれの登場人物も「福島のために」貢献したいという動機を持って進路選択をしていること、事故前と比べて明らかに地域への意識が高まっていることが明らかになった。登場人物たちは一見、自らの意思で職業選択を行い、メディアで表象されてきた旧来のジェンダー像とは異なった主体的な生き方が描かれているようにも見える。一方で、モラトリアムの時間を持たずに地域のための働き手として、大人としての役割を期待されているとも捉えることができる。

家庭とは、子どもにとっていつでも見守られていて、外の世界で危険があれば帰ることができる「安全基地」であるという。それは家庭だけでなく、地域と人間においても同様のことが言えるのではないか。原発事故によって「安全基地」の揺らいでいる状況が、少女の地域社会への結びつきを精神的にも、肉体的な身の置き所としてもより強めていると指摘できる。

**キーワード：**少女マンガ、地域社会、福島第一原子力発電所事故、  
「デイジー～3.11女子高生たちの選択～」、安全基地

# 1. はじめに

## 1.1 研究目的と本論文の問題意識

「デイジー〜3.11女子高生たちの選択〜」（以下、「デイジー」。漫画：ももち麗子、原作：小林照弘、草薙だらゐ、信田朋嗣）は講談社が発行する少女マンガ誌『デザート』に2012年12月号から2013年8月号にかけて連載された。本研究では、福島第一原子力発電所事故（以下、原発事故）を大きい意味での困難の一つととらえ、本来「夢見るための装置」<sup>2</sup>として用いられてきた少女マンガというメディアにおいて、困難な状況に陥った少女が自身の未来を選択するうえで、地域社会をどう意識しているかという観点から本作品の意義を検討することを目的とする。災害時には必ず街をどう立て直すか、「復興」に関する問題が発生する。それは単に建物を元通りにするといったハード面だけでなく、地域社会、コミュニティをどう維持するかといったソフト面の問題とも対峙することを意味している。

「デイジー」は原発事故後の福島の高校に通う4人の高校3年生の卒業までの1年を描いた作品である。事故後の様々な環境の変化のもとで主人公たちが高校卒業後の進路決定・職業選択を行う経緯と表象に着目した。原発事故後の社会において、人々は常に選択を迫られることになった。それは自らの価値観を問う選択であり、そのことは事故前の社会にはなかった状況なのである。

本作品を分析対象とする理由は、原発事故を題材にしたマンガ作品は数多くあるが、本作品が原発の是非を問うたり、放射能に関する知識を教えたり<sup>3</sup>するといった趣向のものではなく、事故の影響によって起きた生活の変化をより個人的なレベルで登場人物の心の葛藤とともに描いている作品だからである。

- 1 マンガ研究では執筆者によって「まんが」「漫画」「マンガ」「コミック」など表記の違いがあるが、本研究ではカタカナの「マンガ」を用いる。
- 2 米沢嘉博、「少女マンガの現在・過去・未来」、『別冊太陽 子どもの昭和史 少女マンガの世界II 昭和38年～64年』、平凡社、1991年、p.5。
- 3 マンガだからこそ新聞やテレビのように第三者に編集されることなく、作者の意見をそのまま読者に伝えられるという利点がある。

藤本由香里によると、少女マンガは「女性の、女性による、女性のための」<sup>4</sup>メディアであり、女性の価値観がそのまま表れるメディアであるという。そして、マンガは描き手が意図する・しないにかかわらず、その時代の習慣や文化が反映されるメディアでもある。もちろん、マンガはフィクションであり、現実をそのまま描いているとは言えないが、作者のももち麗子は福島の高校生・大学生などに取材を行い執筆しており、登場人物は架空の存在だが「彼女たちの思いや体験のほとんどは取材に基づいて構成」<sup>5</sup>した作品となっている。登場人物の心の中の表現や少女の成長を描いている点において、本作は典型的な少女マンガといえるが、そこに作者の社会問題に対する冷静な視線が横たわっている点で、フィクションの中にもリアリティを持った内容となっているため、本作を研究対象とした。

本稿では、これよりまず原発事故の概要と、少女マンガにおける先行研究、福島原発事故を題材に扱ったマンガ作品を背景として踏まえ、たうえで、「デイズ」の登場人物の進路選択と地域社会への意識に関する具体的な作品分析を行う。

## 1.2 福島原発事故の事故概要

2011年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災によって起きた原発事故は、1号機から4号機までが国際原子力事故評価尺度（INES）の尺度でレベル7という史上最も深刻な原子力事故となった。

2012年12月には野田佳彦内閣が「収束宣言」を行い、2015年9月には双葉郡楢葉町で避難指示が解除された。しかし、福島第一原発の廃炉をめぐる作業は難航しており、現在も44387人<sup>6</sup>の住民が県外に避難したままとされている。事

- 4 藤本由香里、「少女マンガとジェンダー」、夏目房之介、竹内オサム編『マンガ学入門』、ミネルヴァ書房、2009年、p.168。
- 5 ももち麗子、小林照弘、草薙だらひ、信田朋嗣、『デイズ～3.11女子高生たちの選択～』、単行本1巻、講談社、2013年、p.5。（以下の引用では単行本の巻数とページ数のみ表記する。）
- 6 復興庁ホームページ「避難者数等の推移」（2015年9月30日発表、アクセス日：

故は現在進行形であるが年々報道量が減り続けており、それに伴い原発事故への関心が薄れることが懸念される。

### 1.3 少女マンガにおける少女の表象と役割

本項では「デイジー」がカテゴリ化されている少女マンガにおける、少女の表象およびその役割、物語の傾向について、先行研究を中心に述べる。少女マンガは「低俗とされ認知を受けていなかったマンガ文化の中でさえ、最下層に位置していた」<sup>7</sup>とされ、少女マンガ研究はマンガ研究の中でも近年急速に発展してきた分野であるといえる。

斎藤美奈子は『紅一点論』で、アニメや特撮などの子どもメディアのヒロイン像について論じている。男の子向けの作品と女の子向けの作品をそれぞれ「男の子の国」と「女の子の国」とし、「男の子の国」は「モモタロウ文化の国」<sup>8</sup>であり英雄譚が物語のメインであり、「女の子の国」は「シンデレラ文化の国」<sup>9</sup>であるとした。斎藤は「女の子の国」とは「女の子用の物語の典型といえ、やはり「お姫様もの」、姫君婚姻譚である。逆境にあったお姫様が王子様にめぐりあい、試練をこえて結婚にこぎつけるラブ・ロマンス」<sup>10</sup>だとし、現代の女の子向けの物語にもその流れが継承されていると指摘している。さらに斎藤はヒロイン像を「魔法少女」、「紅の戦士」、「悪の女王」の3役に類型化した。特に女の子の国のヒロインである「魔法少女」とは、おおむね15才未満であり、ペットなどの何らかの家来に守られ、結婚が将来の夢であるという、男親から見た理想の娘<sup>11</sup>であるとし、「魔法少女」のことを「バタフライ症候群」と名

---

2015年10月3日) [http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/20150929\\_hinansha.pdf](http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/20150929_hinansha.pdf)

7 米沢嘉博、「少女マンガの系譜 華やかな誕生と熟成」、『別冊太陽 子どもの昭和史 少女マンガの世界 I 昭和20年～37年』、平凡社、1991年、p. 4。

8 斎藤美奈子、『紅一点論—アニメ・特撮・伝記のヒロイン像』、筑摩書房、2001年、p. 13。

9 同 p. 14。

10 同 p. 14。

付けた。斎藤はまた、「女の子の国」の作品であっても男性からの視線で作られており、だから実際には女性からは支持されにくいというところにまで言及した。

押山美知子は『少女マンガ ジェンダー表象論 〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』、で、少女マンガにたびたび見受けられる〈男装の少女〉の変遷を、元祖〈男装の少女〉である「リボンの騎士」から2000年代に描かれた作品葉鳥ビスコ作「桜蘭高校ホスト部」、水城せとな作「放課後保健室」まで論じた。押山は、「リボンの騎士」の主人公サファイヤは、作者の手塚治虫がよく見ていた宝塚歌劇の創始者・小林一三の家父長制に基づく教育方針や価値観に影響を受けていると指摘した。〈男装の女性〉は「リボンの騎士」におけるサファイヤの「〈性別越境〉は、ヒロインの主体性獲得のための実験的な試みなどではなく、むしろ既存のジェンダー・カテゴリーを補完する役割を果たす、『越境』と呼ぶには程遠いものであった」<sup>12</sup>時代から、2000年代に描かれた作品である「放課後保健室」では「自ら女性の性を選び取り、その輪郭を形作り得る存在へと変貌を遂げた」と論じた。

ベティ・フリーダンは『新しい女性の創造』で米国の女性の自己の確立について論じた。米国の主婦が主婦業に専念することで「空虚さ、また家の外の世界から孤立しているという不安」<sup>13</sup>を持ち、「ますます夫や子供を通して生きなければならなくなった」<sup>14</sup>とし、主婦業という生き方に疑問を呈している。ベティ・フリーダンの指摘する女性の自己の確立の問題と同じく、「『家族』も『性』も『恋愛』も『仕事』も、じつは少女マンガは、常に一つの問いの周りを回っているということだ。その問いとは、即ち——『私の居場所はどこにあるの?』」<sup>15</sup>と少女マンガにもアイデンティティの問題が通底して描かれている

11 同 pp. 44-47。

12 押山美知子、『少女マンガ ジェンダー表象論 〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』、彩流社、2007年、pp. 36-37。

13 ベティ・フリーダ著、三浦富美子訳、『新しい女性の創造 改訂版』、大和書房、2004年、p. 176。

14 同、p. 179。

ことだと藤本は指摘している。こうした問題意識には戦後以降の女性の社会進出が徐々に進展していった時代背景があり、押山の研究から少女マンガも時代とともに変化している面もあるが、斎藤の指摘の通り、旧来のジェンダー表象を意識せざるをえない面もあることがわかる。

#### 1.4 福島原発事故を題材に扱ったマンガ作品

東日本大震災および原発事故を題材に扱ったマンガは筆者が把握している限り30タイトルを超えている。マンガはその時代の出来事や流行などが内容や表現に反映されることが多いメディアであるため、今後も新しい作品が増えることが予想される。

特に注目を浴びた作品を例として挙げれば、「美味しんぼ」（作・雁屋哲、画・花咲アキラ、『週刊ビッグコミックスピリッツ』連載）では2014年22・23合併号に、主人公の新聞記者・山岡士郎が福島県に取材に行った後で鼻血を出し、それが放射能によるものではないかという描写があり、福島県などの自治体が抗議し、大きなバッシングを受けた<sup>16</sup>。

その後NHKが2014年6月2日に「いま福島を描くこと～漫画家たちの模索～」を放送した<sup>17</sup>。また、東日本大震災以前から、原発事故や原子力をテーマに扱った作品では連載そのものの継続に影響を受けたものもある。『週刊漫画ゴラク』に連載されていた「白竜～REGEND～原子力マフィア編」（原作・天王寺大、劇画・渡辺みちお）は2011年3月18日発売号をもって連載中止になったが、2013年8月23日発売号から再開し、無事に完結した<sup>18</sup>。また、原発事故

---

15 藤本由香里、「私の居場所はどこにあるの？ 少女マンガが映す心のかたち」、学陽書房、1998年、p.4。

16 その後、『週刊ビッグコミックスピリッツ』2014年25号で10ページの特集記事「『美味しんぼ』福島の実態編に寄せられたご批判とご意見」が掲載された。

17 NHK ONLINE クローズアップ現代ホームページ「いま福島を描くこと～漫画家たちの模索～」[http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02\\_3506\\_all.html](http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3506_all.html)（アクセス日：2015年10月6日）

18 天王寺大（原作）、渡辺みちお（劇画）、『白竜～REGEND～原子力マフィア編・上』、



後の東京を舞台にしたSFマンガ「COPPELION」（井上智徳、週刊／『月刊ヤングマガジン』連載）はアニメ化の計画があったものの大幅に遅れ、2010年の製作発表から3年たった2013年に放送された<sup>19</sup>。

他にも話題になった作品には、福島原子力発電所で実際に作業員として働いた経験を描いた「いちえふ 福島第一原子力発電所労働記」（竜田一人、『週刊モーニング』連載）がある。実際に就労するまでの過程から作業の内容、福島での生活、マスメディアが報じる原発事故像の疑問が描かれている。発表される媒体としてはマンガ雑誌にとどまらず新聞や週刊誌での連載もあり（しりあがり寿の「あの日からのマンガ」収録の「地球防衛家のヒトビト」は『朝日新聞』、山本おさむの「今日もいい天気」は『新聞赤旗』日曜版に掲載、小林よしのりの「ゴーマニズム宣言」は『SAPIO』）、媒体の傾向も様々でかなり広い範囲で原発事故が題材として扱われていたことがうかがえる。

女性マンガ家が描いた作品や女性向けの作品も一定数あるものの、とりわけ10代をターゲットとした少女マンガ作品は少ない。たとえば、ごとう和は『エレガンスイブ』（秋田書店）で南相馬の幼稚園の副園長先生の奮闘を描いた「手をつなGO！「陸の孤島」南相馬の子どもたち〜」を発表し、石塚夢見は「ほんの森でまってる〜原発避難区域・飯館村の本屋さんより〜」を発表した<sup>20</sup>。少女マンガでは萩尾望都が読み切り作品「なのはな」、「ブルート夫人」、「雨の夜—ウラノス伯爵」、「サロメ20××」を“シリーズ ここではない★どこか”として発表した<sup>21</sup>。萩尾は放射性物質を擬人化し、彼／彼女らを理想のエネル

---

日本文芸社、p. 2。

19 ファミ通.com『「COPPELION」2013年秋テレビアニメ化再始動』2013年7月15日の記事。<http://www.famitsu.com/news/201307/05036115.html>（アクセス日2015年10月2日）

20 これらの作品は、他の東日本大震災関連の読み切り作品とともに『Akita Documentary Collection 3.11あの日を忘れない』全5巻として2013年2月に単行本化された。『エレガンスイブ』はターゲットが成人女性と考えられる。

21 「なのはな」は『月刊 flowers』2011年8月号、「ブルート夫人」は『月刊 flowers』2011年10月号、「雨の夜—ウラノス伯爵」は『月刊 flowers』2012年2月号、「サロメ

ギーとして持ち上げたかと思いきや禁忌の存在として封じ込めようとする人間の身勝手さを描いた。

一口に原発事故を題材にとっても、作者の表現したいことや描き方は多種多様であり、作者が語り手となり主張を展開するものや、実在の被災者がそのまま登場するルポルタージュ形式のものや、架空の人物を登場させてストーリーを展開するものなどさまざまである。次項から「デイジー」の表象について述べる。

## 2. マンガ「デイジー」の背景

### 2.1 マンガ「デイジー」とは

あらすじを以下に示す。

舞台は原発事故後の福島の若葉高校。3年生の美美、あやか、萌、マユの4人の卒業までの1年間のできごとと卒業後の進路決定の様子が描かれる。

主人公の美美は原発事故後、家に引きこもっていたが始業式後2週間たつてようやく初登校した。美美は貧血や下痢、しっしん、体のだるさなどの症状に見舞われ、放射能の情報が錯綜する中で困惑していた。お嬢様の萌は新学期早々に転校し東京へ行くが、「福島の女」であるという理由で東京の彼氏に振られてしまう。萌はすぐに福島に戻ってくるが、自殺未遂を凶ってしまった。萌が振られた理由を知った美美たちは東京に行き、萌の元彼に復讐をするが、萌は再び家族とともに福島を離れたのであった。

米農家の娘・マユは卒業後、上京し渋谷109で働くことを夢見ていたが、検査で放射性物質が検出されなかったにもかかわらず米が売れなくなり落ち込む父を見て、実家の家業を継ぐことに決める。旅館の娘・あやかは家の旅館が風評被害で客が減ってしまい、廃業の危機と両親の離婚の危機の2つにさらされる。だが仮設住宅での子どもたちとの触れ合いによって、もともとは将来の夢

---

20××」は『月刊 flowers』2012年3月号にそれぞれ掲載された。その後「なのはな」の続編である「なのはな—幻想『銀河鉄道の夜』」が2012年1月に書き下ろされ、2012年3月にこれらの作品を収録した『萩尾望都作品集 なのはな』が単行本化された。

がなかったあやかは福島で教師になることを決意する。その後離婚の危機は回避されるも、廃業し他県に職を求める両親を支えるために卒業まであとわずかである2学期半ばに岡山へ転校していく。

そんな中で主人公の美美は自分の進路を決めかねていた。仮設住宅のボランティアで知り合った警戒区域からの避難者であるおじいさん「熊さん」の自殺から、警戒区域の実情を目の当たりにする。そんな中で政府は原発事故の収束を宣言する。政府の言うことが心底信用できなくなってしまった美美だが、弟の総理大臣になりたいという話から、政治家になって福島を復興させるという夢を持ち、東京のT大を受験するのだった。美美は他県に転校していったあやかや萌をはじめとする同級生を若葉高校に集め、「もう一つの卒業式」をしようと提案する。彼女たちは好きで転校していったわけではないためだ。先生や保護者に見守られながら「もう一つの卒業式」は大成功する。そして無事に志望校に合格した美美は3人の友人に見送られ「必ず帰ってくる」と決意を新たにして福島を後に上京する。

## 2.2 作者・ももち麗子と制作過程

ももち麗子は援助交際をテーマにした『いたみ』（1998年）、レイプ被害を描いた『ひみつ』（1999年）をはじめ、いじめやドラッグなど社会的に問題となった事柄をテーマにした「問題提起シリーズ」を少女マンガ雑誌『デザート』（講談社）に発表してきた。

「デージー」はもともと「ピエロ～夜明け前～」という小説を原作にしており、原作は小林照弘、草薙だらい、信田朋嗣の3人、マンガにももち麗子の4人が制作者となっている。ももちは2012年夏に福島市と二本松市に取材に行き、現地の高校・短大の学生・生徒たち、教員、保護者に話を聞いた。フィクションだが登場人物の体験や思いに関しては取材に基づいた構成を行っている<sup>22</sup>。単行本は全2巻で、1巻は2013年3月、2巻は2013年8月に発行されて

---

22 『デージー』1巻、p.5。

いる。「ピエロ」と「デイジー」は登場人物の設定の違いをはじめ、小説にはなかったエピソードの追加、小説にはあったがマンガには描かれなかったエピソードもあり、「デイジー」は単純に原作をマンガ化したのではなく、ももちがストーリー作り大きくコミットしていると考えられる。

「デイジー」が他の原発事故をテーマにしたマンガとは異なる点は、作者の主張を展開するのではなく、少女の日常生活に原発事故の影響がどう及ぶのかを、少女マンガの最大の特徴である登場人物の細やかな心的な変化の表現によって描いている点にある。マンガのセリフでは主に、実際に登場人物どうしが会話しているものと、心の中で考えていることがセリフになっているものの2種類がある。本作品は、物語の進行とともに主人公の美美の心中の語りがなされており、他の登場人物はほぼ心中のセリフはなく、会話のセリフのみでストーリーが構成されている。そこから美美の視点でストーリーが展開し、原発事故の影響から起きる様々な出来事に対する苦悩や葛藤、喜びや悲しみといった感情表現を見ることができる。

本作品は少女マンガというフィールドで社会問題をテーマに取り組んできたももちの作風の延長線上にあると言っていい。ももちは単行本1巻に封入されているペーパーで「進まぬ復興、未だ残る放射能への不安のなか、前向きに生きる姿を知って彼女たちの思いを、現実を伝えたくてこのお話を描き始めました<sup>23</sup>」と制作への思いを語っているほか、単行本2巻では読者からさまざまな反応が寄せられたことについて「一番多かったのは、「福島のことをもっと知りたい」「福島のことをちゃんと考えたい」という全国の若い方々の声でした<sup>24</sup>」と語っている。

### 3. 「デイジー」における分析と4人の登場人物の役割

#### 3.1 研究対象と分析の視点

本研究では「デイジー」全2巻の中における登場人物の表象を分析対象とす

---

23 『デイジー』1巻に封入されたペーパーより。

24 『デイジー』2巻のカバー折込部分の作者のコメントより。

る。分析の視点としては、本作品において登場人物の地域への意識を分析する際に、登場人物の設定がどのようなものかを踏まえる必要があり、それらの設定がどう活かされ、セリフや物語に結びついているかを検討する必要があると考える。よって、第1に主要な登場人物である美美、萌、あやか、マユ、4人の設定について、①髪型、②外見の特徴、③性格、④趣味、⑤家庭環境、⑥それぞれのボーイフレンド像、以上の6点の項目をたて、4人の役割について検討する。第2に4人の進路決定・職業選択を行う経緯を、①事故以前の進路希望、②事故後の進路希望、③進路変更のきっかけ、④転校の有無、以上の4点の項目を設定し、彼らが地域をどのように意識しているかを考察する。以下の考察は、これらの結果をもとに行う。

### 3.2 4人の登場人物とその役割

このマンガの主要な登場人物は4人おり、それぞれまったく異なる傾向の人物である(表1)。主人公の美美は「学年トップ」(1巻p.19)であり成績優秀な生徒である。最も彼女の性格を表しているのが事故後引きこもっていた美美が初登校してきた日の友人たちとのやりとりで(図1)、美美は福島を出るべきか否かを悩んでいたが登校したことについて、「白紙のまま答案用紙を提出するようで／不本意であるのだが……」、「『とりあえず受験に専念する』それが今の私が出した結論」と、自身の生活の問題も試験になぞらえて「結論」という言葉を用いて語るどころから、答えをはっきり出そうとする傾向や、物事を筋道立てて考えようとする性格が見て取れる。

続いて美美の友人である萌、あやか、マユについて述べると(図2、あやかは右、マユは左、萌は下)、萌は「ピアノと生け花が趣味の超お嬢様」(1巻p.29)である。そして3人目のあやかは「BL<sup>25</sup>をこよなく愛し」(1巻p.29)しており、オタク系である。4人目のマユは「オシャレ番長」(1巻p.29)であり、

---

25 BL…「ボーイズラブ」のこと。「女性を主なターゲットとしたジャンルで、基本的には身も心も男性同士の性愛・恋愛物語である」。西原麻里、「やおい・ボーイズラブ」、夏目房之介、竹内オサム編、『マンガ学入門』、p.227。

表1 「デイジー」における主要登場人物の性格付けと設定

名前	久保美美	竹中萌	花野あやか	橋村マユ
一言で言うと	頭脳派	お嬢さん	オタク系	ギャル系
髪型	黒髪（ツヤベタ）、ショートボブ	ストレートのロングヘア、ベタはなし	ぱつぶん前髪（トーン）、ツインテール	ウエーブがかったロングヘア（ベタなし）
外見の特徴	カジュアル系、私服はパンツスタイルが目立つ	ロングスカート、ワンピース、両手でカバンを持つなどのしぐさ	ゴスロリ系、メガネ、ニーハイソックスにミニスカートなど	ギャル系、「オシャレ番長」（1巻 p.29）、唇にトーン、丸いハイライトで唇につやがある表現（クロス）、ネイル、ピアス
性格	萌の元彼への復讐、「もう一つの卒業式」の企画者で、リーダーシップを発揮している。思慮深い。	ほんわか、育ちの良さからくる脆さ	両親を支えるために本当は福島を出たくないが県外に転校するなど、自分を押し殺す描写	感情表現が激しい「瞬間湯沸かし器」（1巻 p.52）、机を蹴る、襟首をつかむなどの描写
趣味	強いというなら勉強、成績優秀で学年トップ	ピアノ、生け花	BL好き、デジオタ、軍オタ、昭和オタ	オシャレ
家庭環境	サラリーマンかつ学童指導員の父	代々続く県会議員の父	旅館経営	米農家
ボーイフレンド	予備校が同じで建築屋の「玉木くん」	東京の有名コメンテーターの息子・藤田敦	仮設住宅住まい、サテライト校の「井上くん」	他校の「銀次」



図1 主人公・美美の性格が表れる描写（ももち麗子他、『デイジー』1巻 p.19から引用）

唇にトーンが貼られていたり、唇に丸いハイライトを置くことでつやがある表現をしており、リップグロスを塗っている、ネイルアートをしているという表現がなされている。これらの表現から、マユが非常にファッションに関心の高いことがわかる。

髪型は全員が異なっており、美美は黒髪で、あやかはスクリーントーン<sup>26</sup>が貼られ、萌とマユは2人ともベタ<sup>27</sup>なしの長髪だが、萌はストレートヘアで前髪が目の上まで下ろしてあり、マユはウエーブヘアで長い前髪をピンで留めている。外見上の特徴は、マンガでは読者に登場人物が一目で見分けがつくように顔のパーツや髪型、服装

などで「描き分け」をする必要がある。描き分けは見た目だけでなく、性格や行動の違いでも行われるため、マンガではまったく趣味やタイプの異なるメンバーがグループとして扱われること<sup>28</sup>は珍しくないが、現実の学校社会におい



図2 友人たちの人柄や家庭環境 (ももち麗子他、『デージー』1巻 p. 29から引用)

26 マンガの原稿作成に用いる、柄が印刷されたシール状の画材。

27 画面を墨で黒く塗ること。

28 例えば「ドラえもん」(藤子・F・不二夫)ののび太、ジャイアン、スネ夫としずかちゃん、「落第忍者乱太郎」(尼子騒兵衛)の乱太郎、きり丸、シンベエ、学園ものではないが「ONE PIECE」(尾田栄一郎)のルフィとその仲間たちなど、枚挙にいとまがない。

ては極めて珍しいといえるのではないか。鈴木翔は学校のクラス内のグループの格付け、序列、力関係など、誰もが学校生活の中で感じていた人間関係を「スクールカースト」と定義した<sup>29</sup>。「スクールカースト」のもとにおいてはこの4人が一緒のグループになることはかなり難しいといえるのではないか。一見仲良くならなさそうな4人をまとめているのが軽音楽部でのバンド活動であり、3年生なのですでにバンドは解散してしまっているが、そのバンド名が「デイジー」であるという設定となっている。そしてそれぞれの家庭環境も異なっており、美美の父はサラリーマンで、かつ学童の指導員もしており、萌の父は県会議員、あやかの家は旅館を営み、マユの家は米農家を営んでいる。

また、4人にはそれぞれ交流のある男性の登場人物がいるが、ストーリーにおいてはあくまでも美美たち女性の登場人物が主軸となっている。それぞれの距離感も様々で、美美と予備校が同じで実家が建築屋の「玉木くん」は美美に片思いをしていたがストーリーの中で徐々に距離を縮め、最終回では彼氏という扱いになる。萌の彼氏の「敦さん」は震災前から交際していたがその別れが描かれており、あやかと交流のある「井上くん」はあやかが物語の終盤で転校する直前に初めて連絡先を交換するという関係性である。マユは他校の「銀次」のことを最初「ただのつかいっば」（1巻 p.110）と言いつつも、「制服デートしたかったな」（2巻 p.117）と話すなど、4人の恋愛観もそれぞれ異なっていることがうかがえ、バリエーションのある関係性となっている。

これらの4人の設定の違いは、描き分けやストーリー展開のためのものにとどまらず、登場人物と同世代であるより多くの読者の感情移入を助けるものになっていると考えられる。

#### 4. 登場人物たちの進路決定の過程と地域への意識

本章では、登場人物4人の進路決定において、事故前と事故後の希望する進路の違いと進路変更のきっかけ、転校の有無から地域がどのように意識されて

---

29 鈴木翔、『教室内カースト』、光文社、2012年。



表2 主要な登場人物の進路決定の推移と動機

名前	久保美美	竹中萌	花野あやか	橋村マユ
以前の進路希望	東京のT大	記述無し	やりたいことがない	渋谷109で働きたい
事故後の進路希望	東京のT大(政治家になるという目標)	福島でカウンセラーになる	福島で教師になる	実家の米農家を継ぐ
進路変更のきっかけ	弟の総理大臣になりたいという発言	福島の女性だという理由で彼に振られた自分の体験から	仮設住宅での子どもたちとの交流	風評被害で米が売れなくなり落ち込む父を支えたい
転校の有無	無	有	有	無

いるかを分析する(表2)。また、それを踏まえてストーリーと登場人物のセリフから、彼女たちの地域社会との結びつきがどのように変化していったのかを考察する。

#### 4.1 萌—彼の差別的な発言とラベリング

いわゆる「お嬢様」の萌は11年4月に東京に転校してしまうが、すぐに福島に戻ってきた。美美たちに再会した萌は異様にテンションが高く、美美たちは、萌の帰ってきた理由が事故前から付き合っていた東京の彼氏に振られてしまったこと、振られた理由が「福島の女」だったからだと言われる。萌は「もうなにも見たくない聞きたくない／いっそのまま／暗闇の中にいさせてもらえませんか…って…」(1巻p.83)と思いを詰めたような表情を見せるが、美美の励ましに涙する。その後萌は美美に「他県の男の人と付き合うならこの街の出身ってこと言っちゃダメよ／絶対に」(1巻p.90)と言った後、自宅で自殺未遂を図ってしまう。美美たちは激しく動揺するが、萌が自殺を図る前に美美のパソコンのメールに、別れ話の一部始終を録画した動画を送信していた。

萌の元彼の藤田敦は「キミとはこれっきりにしたんだ／だって萌ちゃん放射能浴びちゃったじゃん／残念だけど…つかパパが反対してんだよもう…」と切り出す。萌が「福島の人はみんな被爆してる／福島の女とだけは絶対結婚してはいけないと…／あなたたち親子はそう言ってるのね…」と言うと「しょーがないだろ／みんな口に出してないだけでそう思ってるんじゃないかな」、「放射能がうつる危険おかしてさあ／今日こうしてキミと何分も接触した

んだぜ／オレの誠意もわかってよ」(1巻 pp.112-114)と話す。

間違った知識による藤田の発言に美美たちは怒り、東京へ行き、藤田に萌の動画をネット上にアップロードするとちらつかせ、「あなたが言ってるように／私たちは被爆してるかもしれない／将来健康被害が出るのか出ないのか／わからないからとても不安なの／とても怖いの／『不安と恐怖の毎日』ってやつ／少しは共有してくれてもいいんじゃない？」(1巻 pp.124-125)と言い残して去った。しかし美美は最初から動画をアップロードする気などなかった。

その後萌は両親とともに北海道へ引っ越すが、最終回の美美が上京する際に「私福島でカウンセラーになる／子供もお母さんもおばあちゃんも／福島の女性すべての力になりたい／あんな思いした私だからこそ／できるんじゃないかって……………」(2巻 p.144)と夢を語る。

萌の事故前に希望していた進路に関しては描写がない。しかし事故後は福島でカウンセラーになるという希望を持つようになった。カウンセラーになると決めたきっかけは上述した失恋であり、いわれなき偏見によって「福島の女」が差別されるという体験に基づいている。転校は福島から東京へ、また東京から福島へ、そして自殺未遂後に福島から北海道へと3回にわたっている。

元彼の父はテレビコメンテーターの藤田義政で、「福島は安全だなんの問題もない」(1巻 p.116)とコメントしている立場である。表では放射能の問題はないと言いながら、本音では放射能を理由に福島のを排除するという社会の欺瞞の構造が描かれているといえる。ラベリング理論を提唱したハワード S. ベッカーによれば、「社会集団は、これを犯せば逸脱となるような規則をもうけ、それを特定する人々に適用し、彼らにアウトサイダーのラベルを貼ることによって、逸脱を生み出すのである」<sup>30</sup>と述べており、萌と藤田の関係からは男性側＝選ぶ側の立場から「福島の女」というラベリングをしているという構図を見ることができる。また、敦の別れた理由を父のせいにしたり、「みんなそう思ってる」という発言から、あくまでも自分は悪くないという人間の

---

30 ハワード S. ベッカー著、村上直之訳『完訳アウトサイダーズ ラベリング理論再考』、現代人文社、2011年、p.8。

ずるい部分が描かれている。

萌は原作の小説では自殺を図り、そのまま亡くなってしまうという最期をたどっているが、マンガでは一命をとりとめ、最後に将来の夢を語るという希望がある展開になっている。過去のインタビューでももちは「漫画としてのロマンがないと結果的に読んでもらえない。ということは、メッセージも伝えられない。だから、現実はそんなに上手くいかないかもなあ……と思いながらも、未来に希望を残して描こうと思っています。」<sup>31</sup>と語っており、こうした理由が原作とマンガの萌のストーリーの違いにつながっていると考えられる。事故前の萌の将来の夢について語る描写はない。だがやはり自分と同じ立場である「福島の女性」のために福島でカウンセラーになり働きたいという選択は、自分の失恋が進路選択の原初体験になっているといえる。萌は事故後に住む場所として福島を離れてはいるが、事故前よりも故郷である福島を強く意識していると考えられる。

## 4.2 マユ一家の仕事と地域が直結

ある日マユが頬に殴られた痕をつけて登校してきた。驚く美みにマユは実家の米農家に届いた1通のFAXを見せる。そこには「今年はお断りします／消費者の健康をどう考えているのか／この時期に福島で米を作り、売るなんて「殺人」と同じではないでしょうか」（1巻 p.151）と書かれていた。マユは「たださ…なにが悔しいって…／アタシはなにが悲しいって…／オヤジなんだよ」（1巻 p.153）と父への心配を語りだす。予備検査を受けて放射性物質が検出されなかったにもかかわらず米の注文が入らず、お断りの手紙やFAXを前に落ち込む父の背中ではまるで「リスの背中みたい」（1巻 p.155）になってしまったといい、毎朝欠かさず畑に出ていた父が今朝初めて畑に出なかったことにマユはショックを受ける。そして「フクシマの田んぼを救うのはウチら農家だ／オヤジの田んぼを守るのはうちの家族だ／オヤジの力になりたい／だからアタ

---

31 ももち麗子、デザート編集部監修、『問題提起シリーズ オフィシャルファンブック おもい』、講談社、2006年、p.20。

シは家を継ぐっ」(1巻 p.157)と父に話したところ殴られたというのが頬の傷の理由だった。事故前は東京で就職し、渋谷109(マルキュー)で働くことを夢見ていたマユだが、芙美を連れて放課後父と話し合うために家に向かう。マユの父は「苦労は売ってでもするな!!」(1巻 p.163)と言い、娘が家業を継ぐことを反対するが、マユは「アタシがこのオヤジの田んぼを守ってやるよ」、「アタシはオヤジと一緒に米作りてえよお——っ」(1巻 p.166)と号泣し、父も涙ながらにそれを認める。

マユの場合は、事故前は東京へ出て就職したいという希望があったが、事故後は福島にとどまり実家の米農家を継ぐというまったく方向性の異なる進路変更となった。転校はせずに福島で生活を送り、卒業後も福島で暮らすことになった。農業はいわゆる第一次産業に分類されるが、福島の農家では事故後に出荷停止や作付の自粛、流通業者や消費者の買い控えなどによって大きな打撃を受けており、マユの場合は地域産業の問題がそのままダイレクトに家庭の問題に直結しているケースとなっている。注文が入らず小さくなった父の背中を見て、家業の危機を感じ取ったことがマユの進路変更の動機となっており、父の仕事を継ぎ、家庭内での労働力の担い手として貢献することがそのまま福島への貢献とつながる例となっている。

#### 4.3 あやか—福島の子どもも自分の親も支えたい

あやかの家は旅館を営んでいるが、事故以降風評被害で宿泊客が激減し、経営を続けるか否かで両親が毎日のようにケンカをしているという、家の仕事と離婚の2つの家庭の危機にさらされている状況にある。「まあ わたしは将来の夢とかやりたいこと特にないからさ／父親か母親かどっちについていくか決まったらそれから大学選ぶかなア」(2巻 p.5)とあやかは話すが、原発周辺から避難してきたサテライト校の生徒「井上くん」との出会いから、仮設住宅の集会所に通い、子どもたちに折り紙を教えるなどして交流を持つようになる。そこからあやかは子どもたちを「支えたいって気持ちが強くなったんだ」(2巻 p.47)と語り、「親が失職した子／家族離れ離れの生活が続いてる子／

何度もの転校で順応できずに欠席しがちな子／津波で母親が目の前で流されていった子…」(2巻 p.48)と様々な状況に置かれている子どもたちの苦しみを知り、「わたしはこの福島で大学を卒業して／福島で教師になって／福島で福島の子供たちにずっと寄り添っていきたいんだ」(2巻 p.49)と語る。そのために福大(福島大学)を受験したいと2人に話す。しかし家の旅館の廃業が決まり、母の実家を頼るため、2学期の半ばに岡山県に転校することになった。マユはあやかに福島に残ってほしいと考え、自分の家に下宿することを提案するが、あやかは「ウ…ウチはさあ3月からの混乱で／家族が崩壊しかけたんだ／それをこれから再生させないといけないんだ／慣れない土地で…ゼロからのスタートなんだよ／疲れ切ってるお父さんとお母さんを支えなきゃ…今家族がバラバラになるワケにはいかないんだ」(2巻 p.62)と涙ながらに語る。一度福島で教師になる夢は叶わないかに見えたが、3月の若葉高校の「もう一つの卒業式」に顔を見せたあやかはたくさんの荷物を持って現れ、父が送り出してくれたので4月から福島で一人暮らしをしながら翌年の大学受験を目指すことにしたと笑顔を見せた。

あやかの場合は3年生の2学期半ばに岡山に転校し、卒業式の日に福島に戻ってくるという経緯をたどっている。事故前は特に将来の夢がなかったあやかだが、仮設住宅の子どもを支えたいという動機から福島で教師になることを決意する。本来であればそのまま3年生の冬に受験をするところだが、家が経営する旅館の廃業に伴い他県に仕事を求める親についていくという選択によって、受験が1年先送りになるという影響を受けている。あやかは親のことであり仮設住宅の子どもたちのことでも「支える」という言葉を用いている。しかし、あやか自身もまた家庭においては役割的に「子ども」であり、福島で教師になる目標と親を支えることが同時並行して叶えることができないという状況が描かれている。作中ではあやかはその都合よりも家庭を支えることを優先している。子どもたちのことを気に掛けるあやかもまた、子どもとして自分の家庭を見てきているからこそ、仮設住宅の子どもたちの自らの気持ちを押し殺す部分、抑圧された部分と重ねあわせて共感していると考えられる。

#### 4.4 芙美—福島に現状に問いを突き続ける

芙美は事故直後に父から、父だけが福島に残り、母と弟と共に山形に引っ越し転校することを勧められるが、父と会えなくなるかもしれないという思いから福島にとどまっていた。しかしネットに流れるさまざまな情報から「やっぱり危険なのか？／福島から出るべきなのか？」（1巻 p.17）という葛藤を抱いていた。学校で久しぶりに会ったマユの「ウチのクラス4人転校しちゃったし／芙美もそっち側になっちゃうのかってマジ心配してた」（1巻 p.18）という発言から、「もしも私が福島から出ると言ったら／マユたちはなんて思うだろう／『裏切り者』と言われるのかな…」（1巻 p.39）と懸念し、揺れる。その心境を「けどさ…出ても戻っても／苦しみ続けなきゃいけないのは同じじゃね…／3月10日までは／恋愛とかオシャレとかフツのことに悩むだけで生きていられた／進路だって／『東京の大学に行きたい』『福島から出られればどこの大学でもいい』なんてさ／誰もがフツに言えてたのに／こんなことになった今そーゆー発言って言うほうも聞くほうもちょっとビミョー」（1巻 p.62）と事故前と事故後の気持ちの変化を語る。

月日は流れていくが、なかなか自分がどうしたいのかが見えてこず、「マユもあやも福島に残って／復興に携わる道を選択した…／でも私はT大に行きたいってだけで／その先何がしたいのか未来像が浮かばない／『まずは地元にとどまって復興に貢献します』って／言えればいいんだろうけど…」（2巻 pp.52-53）と思い悩む。そんな芙美に父は「芙美は時間をかけて／じっくり自分のやりたいことを探せばいい」（2巻 p.53）と言葉をかける。

福島を出るか否かだけにとどまらず、芙美の中に様々な葛藤が生まれる。萌が転校した時には福島を出る人間は裏切り者だというマユと、できれば出たいというあやかが大喧嘩をする。そのとき芙美は「私たちなんでこんなことでケンカしなきゃいけないの——…」（1巻 p.58）と心の中で思う。また、萌が自殺未遂を図った時には「どうしてっどうしてっ／萌の様子がおかしいって気づいていたのにっ…こんなことになるまえに…もっと…／私たち萌になにかできたはずじゃ——…」（1巻 pp.103-104）と自分を責める。転校するあや

かとの別れの時には「どうして一緒に卒業式を迎えることはできないの？／どうしてあやの旅館が閉館に追いやられなくちゃいけないの！？」（2巻 p.73）と涙をこぼしながら新幹線のホームを走る。

ある日の夕飯の食卓で、美美の弟は「お外で遊べないのは／そーりだいじんがしっかりしてないからだって！！マイコ先生いった／だからボクが『しっかりしたそーりだいじん』になるんだ」（2巻 p.106）と父に話す。それを聞いた美美は「政治家がしっかりしてれば／いろんなこと変わる…／…のかな……」（2巻 p.107）と何かに気づいたような表情を見せる。そしてとうとう美美は自分の進路を決め、「私東京のT大行く／そして政治家になる」（2巻 p.109）とマユに宣言する。「復興を進めるのにはやっぱり政治の力は不可欠なんだ／だけど今の日本のトップは復興に向けてのリーダーシップを取れているのか…？」（2巻 p.110）と問題提起し、「誰かがやってくれるのを待っていては駄目なんだ」（2巻 p.111）、「福島を／すべての被災地を／必ず復興させる」（2巻 p.113）と決意を新たにする。

美美は父から転校を勧められてはいたが、卒業までの一年間は転校せずに福島で過ごした。進路選択としては東京のT大へ行くという選択は事故前も事故後も変わっていない。だが進学について、美美は事故前なら東京に行くことが当たり前だったと振り返りつつ、福島で進学すべきかで悩む。「自分が復興のために何ができるか」を常に意識して悩んでおり、常になんらかの問いを発し、結論を求めているという様子が描かれる。学校の試験ならばもともと答えがあり、勉強していれば解答することができるが、そこに美美の周囲で起こる様々なできごとに反応する人間としての感情や葛藤が押し寄せてきてなかなかクリアに答えを導き出すことができないという状況が描き出される。弟の言葉が、彼女の9か月間の悩みや心の揺れ動きから結論を導き出すためのヒントになったと考えられる。その結論が「政治家になる」という目標だった。美美が上京できたのは彼女自身のとどまるという決断の他に、あやかの場合と異なり、親の仕事による転勤や失職などの家庭環境の変化がなかったからともいえる。成人であっても家庭環境の影響から完全に逃れることは難しいが、美美た

ちは高校生であり、17、18歳という年齢はまだ成人していないということからもより家庭環境の影響を色濃く受ける。美美の場合は父が彼女の悩んでいる状況を見守る、時間的な猶予を与えるという環境があったため大学に進学することができたといえよう。

## 5. おわりに—困難な状況下における地域社会と女性の結びつきの強化

本研究では、マンガ「デイジー」の登場人物の表象における少女と地域社会との結びつきを見てきた。以上の4人の登場人物の考察から、4人ともが地域を意識した進路選択を行っていること、事故後により地域を強く意識していることが明らかになった。普段は意識しないことだが、地域や暮らしてきた土地はあらゆるものにつながっており、彼女たちは原発事故によって様々な要因において地域を意識せざるをえなくなっている状況がある。マユとあやかの事例では親の仕事が福島とつながっており、そこから地域を意識することとなった。萌は彼氏の発言から女性であること、それも福島の女性であることを意識せざるを得なくなった。美美は思慮深い性格から友人たちの進路や仮設住宅で暮らす人々の生活を目の当たりにして、自分が進学して見識を深めることで、より長期的な視野で、福島の外からも復興に貢献できるのではという思いを抱いている。マンガ作品においては主要な登場人物の設定は必ず存在するが、設定があっても活かしきれずに終わってしまうものも少なくない。「デイジー」においては4人の親の職業、家庭の事情が早い段階で説明されており、彼女たちの選択が周囲の影響を少なからず受けるという関係性が描き出されている。本作品では設定を最大限ストーリー作りに活かし、美美の視点から描き出される葛藤が彼女たちの選択に説得力を与えており、単に理想を語るだけに終わらない作品として実を結んでいるといえる。

登場人物たちは一見、自らの意思で職業選択を行っており、メディアで表象される旧来のジェンダー像とは異なった主体的な生き方が描かれているようにも見える。一方で、モラトリアムの時間を持たずして地域のための働き手とし



での、大人としての役割を期待されているということでもある。高校を卒業し就職することはまったく珍しい話ではないし、そのこと自体は時期的に早すぎるということはない。一方で、将来のビジョンが曖昧なまま、自分の可能性を試しながら自分の将来を模索し選択する準備期間、いわゆるモラトリアム期を過ごす者も多い。しかし「デイジー」の登場人物たちは、原発事故からその後の環境の変化や様々な出来事を通して、当初の予定の変更を迫られたのである。事故前の希望と変わらず、東京の大学へ進学した主人公の美美も、ただなんとなくといった心境ではなく、政治家になり福島を復興させたいというはっきりとした将来のビジョンを持つこととなった。さらに主要な登場人物4人が全員「福島のために」将来の職業選択を行っていることは、彼女たちの思い出や過去になれるはずだった「ふるさと」の危機を表していると考えられる。ライフプランの決定において、故郷への貢献を意識しないで生きるという選択肢も本来なら考えられるためである。

家庭とは、子どもにとっていつでも見守ってもらえていて、外の世界で危険があれば帰ることができる「安全基地」<sup>32</sup>であるという。それは家庭だけでなく、地域と人間においても同様のことが言えるのではないか。ふるさとの状況から引き起こされた「傷つき」こそが彼女らの強さの根源ではないかと考えられる。「安全基地」の揺らぎは非常事態であり、子どもも子どもらしくいることはできず、大人と同じように判断・決断を迫られ、大人と同じような役割を期待される。安心して帰る場所があるからこそ地域の外へ出ていけるのであり、原発事故によって「安全基地」の揺らいでいる状況は、若者の地域社会への結びつきを精神的にも、実際の身の置き所としてもより強めていると指摘できる。

---

32 「安全基地」とはジョン・ボウルビイが提唱した「アタッチメント（愛着）理論」に関係する、メアリー・エインズワースが提唱した概念のことである。子どもの発達において、母親や養育者のことを「愛着対象」と言い、「安全基地」とは愛着対象が子どもに与える安定した環境や信頼感のことを指す。J. ホームズ著、黒田実郎、黒田聖一訳『ボウルビイとアタッチメント理論』、岩崎学術出版社、1996年、p. 90。

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費（研究課題番号14J01126）の助成を受けた。  
また、京都国際マンガミュージアム所蔵の文献を一部使用した。

## 参考文献

- 押山美知子、『少女マンガ ジェンダー表象論（男装の少女）の造形とアイデンティティ』、彩流社、2007年。
- 小林照弘、草薙だらい、信田朋嗣、『ピエロ～夜明け前～』、近代映画社、2012年。
- 斎藤美奈子、『紅一点論—アニメ・特撮・伝記のヒロイン像』、筑摩書房、2001年。
- 鈴木翔、『教室内カースト』、光文社、2012年。
- 夏目房之介、竹内オサム編、『マンガ学入門』、ミネルヴァ書房、2009年。
- 日本マンガ学会、「日本マンガ学会第14回大会 マンガと震災」、『マンガ研究 vol. 21』、2015年。
- ハワード S. バッカー著、村上直之訳、『完訳アウトサイダーズ ラベリング理論再考』、現代人文社、2011年。
- 富士谷あつ子、伊藤公雄編、『ジェンダー学を学ぶ人のために』、世界思想社、2000年。
- 藤本由香里、『私の居場所はどこにあるの？ 少女マンガが映す心のかたち』、学陽書房、1998年。
- ベティ・フリーガン著、三浦富美子訳、『新しい女性の創造 改訂版』、大和書房、2004年。
- J. ホームズ著、黒田実郎、黒田聖一訳、『ボウルビィとアタッチメント理論』、岩崎学術出版社、1996年。
- J. ボウルビィ著、黒田実郎、大羽葵、岡田洋子訳、『母子関係の理論 I 愛着行動』、岩崎学術出版社、1976年。
- ももち麗子、小林照弘、草薙だらい、信田朋嗣、『デিজィー～3.11女子高生たちの選択～』、1、2巻、講談社、2013年。
- ももち麗子、デザート編集部監修、『問題提起シリーズ オフィシャルファンブック おもい』、講談社、2006年。
- 森永康子・神戸女学院大学ジェンダー研究会編、『はじめてのジェンダー・スタディーズ』、北大路書房、2003年。
- 米沢嘉博構成、『別冊太陽 子どもの昭和史 少女マンガの世界 I 昭和20年～37年』、平凡社、1991年。
- 米沢嘉博構成、『別冊太陽 子どもの昭和史 少女マンガの世界 II 昭和38年～64年』、平凡社、1991年。